

堀内康司の遺したものの



松本が育てるDNA

堀内のおじさんがつなぐもの

中山英子



右から「シンスケ」主人・矢部敏夫、中山英子、堀内 (1985年5月、湯島で)

力強い線で描かれた深い青の魚と貝の油彩、優しい表情の馬のモノクロ写真……。『堀内のおじさん』と呼んでいた堀内康司氏の作品は、私が生まれる前から松本の実家に何点か飾られていた。日々何気なく目にしていたおじさんの作品は、不思議とすべて鮮明に記憶している。

昭和五〇年代になると、怪しげで異様な表情の女性たちを描いた池田満寿夫の版画が壁に増えていった。これらは、城下町松本の寒暖の差が激しい清冽な空気感と北アルプスの山々の連なりとともに、私の心の原風景となっている。画家たちの心の内奥をえぐり出すような型にはまらない作品群は、多くの言葉を発し、子どもだった私を刺激していた。

堀内康司氏の母・雪江さんと、私の同居していた父方の祖母晴子(明治四二年生まれ)は、二軒隣の幼馴染みだった。松本市の街なか・飯田町の船屋の三姉妹の長女だった祖母は養子を取り、伯母と父を産んだ。雪江さんの実家はランブ屋。お金持ちのお嬢さんで、芳川村(現・松本市南部)の軍人のもとに嫁ぎ、戦争で夫を亡くした。

満州から帰国し、夫の実家で、貧しく厳しい暮らしを強いられた雪江さんが、若くして病死したことを心から不憫に思っていた祖母は、残された子どもたちのことも案じていた。

高校卒業後、家業を継いだ父を、おじさんは、時々東京に呼び寄せた。「昌明君、昌明君」と都会の文化を見せて回ってくれた。商売の参考になるようにと、いい菓子屋を見せて歩いたり、美味しいものを食べさせてくれたという。私の生後十日日には、お祝いの絵を携え、母の実家に寄ってくれた。その時に写してくれた何枚かのモノクロ写真は、今でもアルバムに残っている。

少しばかり絵画に興味を持っていた父に、蒐める愉しみを伝えたのもおじさんだ。東京では、行きつけの画廊に足を運び、名が売れているかどうかということではなく、絵の本質を父に教授した。「画品のある絵」というのを、よく口にしていた。「一緒に観ることを重ねるうちに、深みのある作品を感じ取れるようになった」と父は言う。時々、新聞記事の切り抜きなどを添え、絵に関する手紙を送って来てくれた。父は、その影響を強く受け、五十年にわたって少しずつコツコツと蒐集した。福井良之助を筆頭に、浜田知明、麻田浩、香月泰男……。『すべて堀内さんに教えてもらった』画家たちだという。

商売が上手く行かない時も多い。毎晩、絵を眺め、心に何か重ね合わせながら、気持ち切り替える。「堀内さんは究極の目利き。俺には理解不能な作品もあったが、本物とは、生きる苦しみを率直に媚びずに描かれたものと、感覚的に教えてくれた」と話す。私より二歳上だった長男の陸ちゃんをちょこんと肩に乗せて松本にひょっこり訪れること度々。陸ちゃんを祖母と母にあずけ、池田満寿夫の絵を持って、松本の知人を回っていたようだ。そんな折、父は「堀内さんは人のことに一生懸命だけど、なんで、自分で絵を描かないの？」と度々おじさんに尋ねていた。曖昧に流され、答えは返ってこなかったようだ。

小学四年生の時、私は大相撲観戦に取り憑かれた。新鋭千代の富士が、無敵だった横綱・北の湖を優勝決定戦で破り初優勝した頃だ。本場所が始まるとテレビにかじりついて観戦記を書いていた。当時、相撲好きというと、「変わった娘」と言われることが多かった。

雪江さんの長男だった堀内のおじさんは、祖母を「おばさん」と慕い、たびたび我が家を訪れ、泊まっていた。国画会で新人賞を取り、東京に移ってからも、松本にひょっこり姿を現した。祖母は食事をふるまったり、「汽車賃」と言ってお小遣いを渡したりしていたそうだ。

堀内のおじさんと同じ年だった伯母は女学校を卒業した頃、芳川村の住まいを訪ねたことがあるそうだ。以前は蚕室だったという住居は「庭先の離れで、人が暮らすには随分不自由だろうに。本当に可哀想に」と伯母の目には映ったらしい。「社交家で都会的な雰囲気」を持っていた堀内青年と、敗戦後の現実生活とのギャップに衝撃を受けたと振り返る。どんな状態にあっても温かく迎えた祖母に恩義を感じていたおじさんは、自分の描いた絵を何枚か家に置いていった。「この絵はそのうちに値がつく」と、伯母に話していたという。若かった伯母は、自信満々だった堀内青年を、「鼻持ちならないわ」と感じた時もあったそうだ。

おじさんは、自身の感性に響いた人物に対して面倒見が良く、無心で尽くしたのは有名な話だと思う。十歳年の離れた私の父・昌明もその一人だった。家に十枚近くあったおじさんの作品に、「インパクトがあり、いい絵だなあ」と幼いながら感銘を受けていたという。

ある日松本を訪れた大の相撲ファンの堀内のおじさんを捕まえ、ちゃぶ台を囲み、祖母のいれたお茶を飲みながら相撲について熱く語り合った。おじさんは本気で私の相手をしてくれた。以来、数年にわたる文通が始まった。やり取りは多い時で週に一回のペース。黄土色で大きめの長方形の封筒が届くと、ワクワクして開封した。互いが才能を見出した力士についての意見交換や、将来の有望性、場所についての感想など。原稿用紙に万年筆、横書きで書かれた生きのいい文章に心が躍った。おじさんが、私の手紙を湯島の老舗居酒屋「シンスケ」のご主人に見せたことから、中一の時、五月場所千秋楽に招待された。松本からあずかに乗って、一人新宿駅に着いた私を、汗ばみながらホームで出迎えてくれたおじさんの圧倒されるような満面の笑顔は忘れられない。ひいき力士・逆鉦の井筒部屋の打ち上げにも参加させてもらい、天にも上る気分だった。

高校卒業以降、なぜかおじさんと会うチャンスはなかった。私は大卒卒業後地元の新聞社に入り、長野五輪の取材をきっかけに、スケルトンにはまった。鉄でできたそりにうつぶせで頭から氷のコースを最高時速二三〇キロ前後で滑り降りる競技だ。心の揺れが瞬時にタイムと結びつく。なかなか極みは見えてこない。自分の心の底からわき上がる何かに突き動かされ、二〇〇二年に新聞社を辞め、四十歳を過ぎて最後の挑戦となるソチ五輪を目指し現役を続けている。一風変わった人生に、本当にいいのか、と時には迷う。

松本で送った子ども時代のキラキラした空気の中で目にし続けた作品と、私の好奇心を本気で育ててくれたおじさんの人となり、私はひどく感化されていたことに今更ながらに気付かされた。堀内のおじさんは真の芸術家だった。

「型にはまらなくて当たり前。私の人生は、これでいいのかな」と思えてくるのである。

(なかやまえいこ スケルトン日本代表・元信濃毎日新聞記者)